大岩正仲先生を偲ぶ

徳川宗賢

雑誌「国語学」73集（昭和43年6月刊）は、昭和41年・42年における国語学界の展望を行なう特集号であった。大岩先生は、そこで方言研究の分野を担当された。冒頭部分は、次の通りである。

東条先生が亡くなった。昭和四十二年十二月十八日。やっぱり淋しい。晩年は寝たきりで何も出来なかったが、お邪魔すれば話は方言の事だけ、御元気な頃には多少あった俗念も消え失せて全く純化して居られた。病床で常に念頭にあったものは方言辞典と日本言語地図とだったようである。（大岩先生の担当していらっしゃる――引用者注）方言辞典も順調に進捗しているのを喜んでいて下さったが、日本言語地図の校正刷を見て実物の完成と早呑込みしていらっしゃったのは、安らかな往生の因縁ともなったものと思えばかえって慰めになる。

方言研究界は長いこと中心を持っていたものである。この文章から、東条先生の御逝去に対する大岩先生のお気持を窺うことができるが、それはともかく、大岩先生が「俗念」といったものを嫌われる、非常に潔癖な方であったことを、いまさらのように強く感じる。

東条先生と大岩先生の御縁は古いもので、大岩先生が外国語学校を御卒業になる直後からではなかったか、と思う。その、いわば師ともいうべき人に対して俗念ということばが出てくるあたり、いかにも大岩先生らしく思われる。

いやらしいもの、汚らわしいものに対して積極的に背を向けて、純粋に本業の学問の研究に取り組もうとされる先生の御態度からは、比較して失礼にあたるかもしれないが、名人といわれる頑固一徹な職人が連想される。この現実世界は、大岩先生にとってまさに目をそむけたくなるほど汚れたものであったに違いない。

もうひとつ、この文章を読んで感じることは、当時すでにかなりの段階までに進行していた「大方言辞典」への、ほのかな自負といったものである。

大岩先生が、東条先生のアシスタントとして、平凡社の『大辞典』（昭和8年）の方言の項目を担当されたのを皮切りに、現在日本唯一の『全国方言辞典』（昭和26年）、『分類方言辞典』（昭和29年）の刊行まで、実質的な作業に力を注がれたことは、よく知られている。

そして、こんどは、いよいよ御自身のお名前で、現在の方言辞典をうわまわること数倍の規模の「大方言辞典」を編集

・刊行さるべく、その作業を着々と進めておいでになったのである。これが、学界挙げて待望するところであったことは、言うまでもない。

結局は、御計画が挫折してしまい、「大方言辞典」の刊行を、御自身の目で御覧になることができなくなってしまった。この「大方言辞典」の編集・刊行は、今後どうなるのか。これは多くの人々の関心事となっているが、それはさておき、昭和43年のこの文章から感じられる当時のお気持ちを思うと、御自身、どんなにお心残りであったかと思う。

しかし一方、最近の「国文季報」(昭和47年)には〝たおれてのちやむ〟というお言葉が見えている。大岩先生は、案外〝できるだけのことはした〟といった爽やかなお気持ちなのかもしれない、とも思う。私など俗人は、〝あの時もっと努力しておけばよかった〟此の後悔の暗い海をたゆたうのが常であるが、大岩先生は、我々には到達できそうもない、もっと清澄な境地に、現在遊んでいらっしゃるのかもしれない、とも思う。

この「国語学」の展望号では、さきに引用した部分に続いて、われわれが編集・刊行しつつある『日本言語地図』に対して、厳しくもまた温いお言葉を賜わった。その微に入り細を穿った御指摘は、まさに大岩正仲先生ならではのもので、この世に、このような厳格・緻密な方とともに生をうけたことを、むしろ嬉しく感じたものであった。このような学問的綿密さの法灯が、誰かの手によって、かならずや受け継がれていかなければならないと思う。

大岩先生と私との御縁は方言の研究を通じてであり、また、大岩先生御自身がライフワークとして取り組んでおられたのが、「大方言辞典」であったことから、いままで先生を語るにあたって、方言研究者として考えがちであったかもしれない。

しかしいま、大岩先生が過去に発表されたものをひとつひとつ思い浮かべてみると、先生は方言の研究者であるとともに、というよりむしろ、まずすぐれた文法学者であられ、またそれに先立って先進的な音韻学者であられたのだ、と思う。

外国語学校ドイツ語科に入学され卒業された先生が、どういう因縁で「国語の表現法について」という処女論文を発表されるようになったのか詳細を、私は知らない。また、京城帝国大学に御入学になる前すでに「国語と国文学」誌上に文法に関する論文を発表され、また、山田孝雄博士の『日本文法学概論』の書評を載せるようになっておられたのか、そのへんの事情も知らない。第一、東条先生と大岩先生との出会いの契機についてさえ、伺っていない。

私も伺わなかったが、また大岩先生も、そういった個人的な人間関係にわたる昔話を、すくなくとも私には、まだあまりお話しにならなかった。御葬儀の折、三谷栄一氏から伺っ

た「東条先生に紹介したのは僕だ」というおことばや、大西雅雄氏の「僕が音声学会の仕事に打ち込むようになったのには、それまで中心になってやっていた大岩君が京城に行くことになったことが、一つのきっかけになっている」などという思い出話に接すると、そんなこともあったのかと思う。

先生の『文語文法概要』のあとがきは、次のような文ではじまる。

大正の末の早稲田中学の生徒として故長野綱夫先生の英語を殊に楽しく学んだが、「学者が学問をするのは軍人が戦場に出ているようなものだ。学問に命をかけるものだ」、何かの機会にこう洩らされた先生のお言葉が、今なお耳にありありと残っている。中学ではまた伊達三喜男先生から国文法に対する興味を芽生えさせられたが、昭和の初めに東京外語の生徒であった四年間には、当時東京帝国大学の助手であった現岐阜大学教授筧五百里先生から、「文法は発見すべきものであって、発明するものではない」と文法に対する根本態度を教えられた。筧先生の御紹介によってしばしば御垂教を仰ぐにいたった橋本進吉先生、数々の御著者御論文を通して甚だ多くお教えをいただいた山田孝雄先生、両先生が既にこの世にいらせられないのは何より残念でならない。

後に言語学の小林英夫先生のお陰で京城大学に学んでからは、高木市之助先生・麻生磯次先生・時枝誠記先生の御指導によって国語学を専攻し、これまでは言わば趣味であった国語学をついに本職として世を渡ることになった。

とある。文中の「小林英夫先生……」あたりについては、「国語と国文学」(昭和43年2月号)に執筆された「時枝先生の思い出」に次のように出てくる。

はじめて(時枝――引用者注)先生の論文を拝見したのは国語と国文学誌上の鈴木朖および富士谷成章に関する二論文で……(中略)……昭和七年の岩波講座日本文学中の「国語学史」にいたっては従来の国語学史と全く違う叙述態度に感銘深くひきつけられて、潑溂たる哉新人の研究云々と、思えばおおけなき読後感を書きつけざるを得なかったものである。

小林英夫先生も、(時枝)先生を高く買っていらっしゃった。東京外語を卒業してから五六年間、何ということなしに国語学の世界に遊んでいた私がいよいよ国語学を専門にするために正規の指導を受けたくなった時、小林先生は、高木・麻生両先生に加えてこの時枝先生を擁する京城帝大を、傍系から入るには第一の理想的な国文科だからといっておすすめ下さって何かと御尽力くださった。

大岩先生は、ふだん午後も七時になると御就寝になり、そのかわり午前二時・三時には起床されて勉学に励まれたという。私などには想像もつかない御生活ぶりであったらしい。

このような生活時間のわりふりをなさる方が、第一回の日本方言研究会が昭和40年に大阪で開かれた時には、同宿の者たちと、徹宵学問について語り合われた。これが、ことのほか楽しい御経験であったらしく、折にふれて、健康が許せばまたあのような機会を持ちたいと話しておられた。先生の生一本な御性格から推して、無論お世辞ではないと思う。いまや、そのような機会は二度とこないのである。

ここ二年ほどは、出講日の関係で、千葉大学においても、おめにかかるチャンスが減ってしまっていた。研究室のお机の上に置手紙をしては、翌週そのお返事を拝見するといった状態が続いていたのであった。そのうちに、こちらからのお手紙が翌週もお机の上で埃をかぶっているといった状態が目立つようになり、ついに、永久にお別かれしなければならない日を迎えることになってしまった。最後におめにかかったのは、五月二十六日、千葉大学からの帰途病院にお見舞に伺った時で、わずか五分間ほどであった。

雑誌「文法」(昭和44年2月号)に執筆筆された「山田孝雄伝(その四)」に、「大好きな新村出先生やあの偉い柳田国男先生」というおことばが出てくる。そのおことばの出てくる前後がまたいかにも大岩先生らしい話なのであるが、それはそれとして、新村先生のどういうところがお好きなのか、伺ってみたい気がする。それもすでに不可能となってしまった。

なんとしても、大岩先生を失ったことは、残念でならない。いま思うと、私などは、何かものを書くにあたって、大岩先生に御覧に入れることができるかどうか、それにふさわしいものができたかどうかを、出来・不出来、まじめなものか・いいかげんなものかの規準にしていたような気がする。端的にいえば、大岩先生にほめていただけるようなものを書きたいと、いつも思っていたようである。大岩先生なら、いいものはいい、悪いものは悪いと、ちゃんと判断して下さるだろう。先生に教えていただいた学生の中にも、同様な気持ちの人が、きっといるに違いない。

いまや我々は、その中心となるべき柱を失って、呆然自失の状態といっていいのかもしれない。しかし、その評価の尺度そのものはすでに我々自身の中にあって、それを見失わない限り、大岩先生は、実は我々の中に生きていらっしゃるということになるのではないか、とも思ってみる。

大岩先生と我々との関係は、まず、学問を通じてであった。その学問をまじめに貫き通すことこそが、生き残った者たちの、大岩先生に応える道ではないかと、私などには思える。そしてお亡くなりになった大岩先生には、心から御冥福をお祈り申し上げるばかりである。

――国立国語研究所員・本学講師――